

## 農耕文化形成期の沼津

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠原, 和大 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/6714">http://hdl.handle.net/10297/6714</a>

# 農耕文化形成期の沼津

篠原 和夫

## はじめに

沼津市辻畑古墳や神明塚古墳の調査の成果は、沼津の地に東日本の中でもいち早く大型の古墳が造られたことを示しています。こうした古墳には、周辺地域を取りまとめるような地域的な首長といふべき人物が葬られていたと思われる。このような大きな古墳が造られた背景には、すでに地域的な社会組織がある程度出来上がっていて、それを動かしていくような中心が存在したのでしょうか。つまり、地域の政治的な拠点もまた、すでに築かれていたことが考えられます。

このような、地域的なまとまりが形成されたきっかけは、やはり集約的な水稻農耕が開始されて、人々が農業を通じて協力し合うような社会が生み出されたことにあると考え

られます。そのような動きは、この沼津の地でも弥生時代の中期中葉頃に始まりませんが、駿河湾と愛鷹山や伊豆・箱根の丘陵地に囲まれたこの地では、また独特の農耕文化の展開がみられます。その独自の様相を示す一つの現象として、古墳が出現する直前頃まで、愛鷹山の山麓に展開した弥生時代後期の高位置集落があげられます。このような集落が出現した背景には、当時の広域的な自然環境や社会環境の変化が考えられますが、一方で、人々がこのような丘陵斜面での生活を選択した理由には、またこの地域独特の環境とその利点があったといえるのだと思います。

以下では、まず、人々がこの沼津の地に住み始めて以来の歴史をたどりながら、その営みの特徴をつかんでみたいと思います。その上で、弥生時代以降の地域社会の基層として、この沼津の地で農耕文化がどのような特徴をもって

形成されたかを考えながら、その道筋をたどっていくことにしましょう。

## 1 沼津の原始文化と農耕文化の形成

### †沼津の旧石器文化

まず、沼津にはどのような人が住み始めたのでしょうか。

沼津で最も古い人類の痕跡は、愛鷹山麓の約三万二千年前<sup>(註1)</sup>と考えられる地層から、数点の石器や石片が発見されているものです。これらの石器は、現在、国内でも最も古いものの一つと考えられています。これ以降の旧石器時代の遺跡が愛鷹山麓ではたくさん発見されていて(図1)、約一万五千年ほど前の縄文時代が始まる頃まで、ほぼ間断なく石器群が見出されています。その中には旧石器時代の終り頃の石囲炉が初めて見つかった休場遺跡があり、国の史跡となっています。沼津周辺では愛鷹山麓のほか箱根山麓にもこうした遺跡が見つかりますが、その内容は、世界的にも注目される豊かなものです(沼津市二〇〇五)。

箱根山麓の三島市初音ヶ原遺跡では、二万七千年前頃の落し穴がたくさん見つかりました(図2)。谷に挟まれた丘陵の斜面上を横断するように、深さ一・五メートルもある穴



図1 沼津市北半部の旧石器時代主要遺跡の分布

が数条、列をなすように掘られたもので、人々が集団で追い込み猟を行った跡だと考えられています。穴を掘る道具が発見しているなかった時期に、このような大規模な遺構が発見されるのは、世界的にも極めてまれだといえます。しかし、愛鷹山麓でも同じ頃に掘られたこのような落とし穴が見つかっているのです。愛鷹山麓や箱根山麓のゆるい斜面と谷に挟まれた尾根線という条件がこのような猟に適していたのでしょう。この頃、人々が協力して落とし穴を掘

り、役割分担をしてシカなどの獣を追った生活があったようです。落とし穴が見つかるのは一時的なものなのですが、先ほど述べたように、その後も愛鷹山麓には旧石器時代の遺跡が展開していきます。

長く続いた旧石器時代は世界的な氷河期にあたり、寒冷的な気候が続いた時期です。愛鷹山南麓のような広大な南向き斜面地は、日当たりが良く、寒冷期でも植物や動物が生育しやすい環境が残されたのだと考えられます。旧石器時代の遺跡がそこに展開したのは、そのような豊かな環境を求めたものだったといえるでしょう。

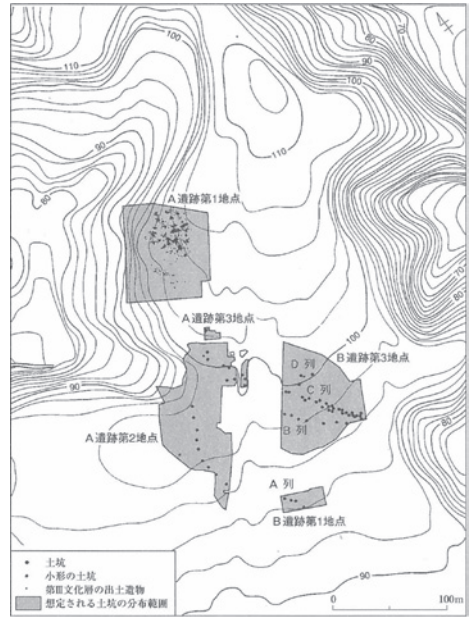


図2 初音ヶ原遺跡第IV文化層の土坑(落とし穴)配置

### †縄文文化の変動

長く氷河期が続いたわけですが、一万六千年前頃からしだいに温暖化する時期が訪れます。縄文文化は、この温暖化する気候の中で現れた豊かな森林環境に育まれた文化だと考えられています。森林に生育する植物、動物を利用する中で人々は次第に定住の度合いを高めていったようので、縄文時代早期頃(一万七千年前頃)には、愛鷹山麓に縄文時代でも最も遺跡数の多い時期を迎えます(図3)。縄文



図3 沼津市北半部の縄文時代主要遺跡の分布

時代前期頃には、温暖化のピークが訪れ、縄文海進とよばれている海水準の上昇が起りました。浮島沼周辺や田方平野でも現在の丘陵地の裾部まで海岸が迫っていたと考えられます。こうした、海の資源を求めたとみられる集落も存在しますが、愛鷹山麓の縄文集落は、縄文早期を中心として中期頃まで、標高一〇〇〜二〇〇メートルの丘陵中腹部に多く営まれます。縄文人が利用した豊かな森林資源もまた、こうした愛鷹山麓の斜面地に求められたことがわかります。

縄文時代前期頃まで続いた温暖期は、前期末頃から冷涼化に向かい、後期・晩期頃にはさらに厳しい環境が訪れたようです。特に愛鷹山麓では遺跡が激減し、晩期には全く遺跡が認められない状況になるといいます。こうした後期・晩期頃の遺跡の減少は東日本の各地で起こったようです。

一方、冷涼化による海退などの環境の変化の中で、特に低地部では河川が運ぶ土砂の堆積が増えて、沖積地や砂堤の形成が進んだようです。愛鷹山の南裾に広がる浮島沼周辺は、この頃から富士川が運ぶ砂礫によって砂堤が形成されて、しだいに陸化していきます。雌鹿塚遺跡や雄鹿塚遺跡は、このような古い砂堤上の遺跡ですが、愛鷹山麓の遺跡に代わって、後期頃から人が住むようになったようです。

特に雌鹿塚遺跡では、縄文晩期後半頃、西日本系土器（突帯文土器）が見られます。西日本では、すでに稲作が始まりつつある時期ですが、設楽博己さんは、この雌鹿塚遺跡の西日本系土器から農耕文化の情報がこの地にももたらされていた可能性を考えています（沼津市二〇〇五）。いずれにしても、この時期の遺跡は、小規模で少なく、こうした状況が、弥生時代の前半期にも続いていきます。

#### ↑沼津の弥生文化（図4）

東日本の太平洋岸では、本格的な水稲農耕が開始されるのは弥生時代の中頃（紀元前三〜二世紀頃か）以降であるといわれています（石川二〇〇一）。沼津周辺の弥生時代前半頃（前期〜中期前葉）は、縄文の系譜をひく条痕文系土器や浮線文系土器を出す遺跡が見られます。いずれも小規模な遺跡ですが、縄文時代以来の植物利用や狩猟・採集に加えて、雑穀などを栽培する畠作が行われていた可能性が考えられます。

弥生時代中期中頃から後半にかけては、最近、沼津でも本格的な農耕を営んだとみられる集落が明らかになってきました。二〇〇九年、辻畑古墳の調査が注目されるようになった頃、もう一つ沼津の弥生時代の遺跡の調査が注目さ

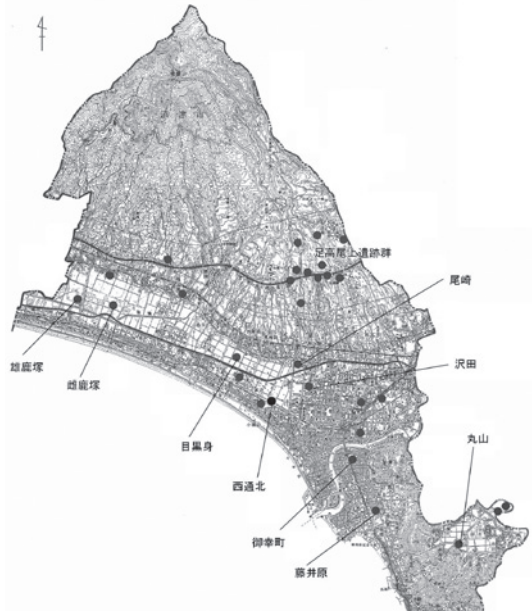


図4 沼津市北半部の弥生時代主要遺跡の分布

れました。浮島低地の東端に位置する西通北遺跡がそれですが、中期中頃の土器を出土する溝が発見され、環濠集落として話題を呼んだのです。沼津で最初の本格的な農耕集落と考えられるものですが、この遺跡については、後でふれることにします。他にも黄瀬川の扇状地や狩野川の低地部にはこの時期以降の集落や方形周溝墓群などが比較的多く知られています。しかし、中期の終わり頃になると遺跡がよくわからなくなる状況が生じるようです。

静岡では登呂遺跡に村ができた弥生時代後期頃（紀元一世紀頃）、浮島低地周辺には再び集落が現れてきますが、その多くは環濠集落として営まれます。目黒身遺跡や尾崎遺跡がそうですが、辻畑古墳の下層にも弥生時代後期の集落と溝が見つかっていて、ここにも集落を溝で囲んだ環濠集落があったようです。

弥生後期後半になると、それまで浮島沼の周縁部にあった集落は衰退し、愛鷹山麓の標高一〇〇〜二〇〇メートル付近に多くの集落遺跡が出現します（足高尾上遺跡群）。植出遺跡の調査では四〇〇軒ほどの堅穴住居が見つかりますが、周辺にもこうした遺跡が広がるようで、かなりの人々が継続してこのような環境に居住したことがわかります。辻畑古墳が築かれたのは、おそらくこの丘陵上の集落が終焉を迎える頃だと思います。

沼津の旧石器文化から弥生文化に至る歴史の概略をお話してきましたが、沼津周辺の独特の地理的環境の中で、愛鷹山の山麓はたびたび人々の活動の舞台となってきたことがわかります。弥生時代の終わり頃、辻畑古墳出現の直前頃も愛鷹山麓には、独特の生活があったとみられます。それは、本格的に農業が始まった弥生時代の中頃から四〇〇年ほどの間に急速に形成された、農耕社会としての地域社

会が、さまざまな環境の変化に独自に対応していった姿だと考えられます。以下では、この沼津における農耕文化の形成と展開について、もう少し詳しく見ていくことにします。

## 2 農耕文化への胎動

### † 農業の始まりの意味と日本列島の農耕の形成

縄文時代が始まる頃の温暖化は世界的な現象で、最終氷期の終わりからの温暖化によって、世界のいくつかの地域では豊かな環境が生まれたといわれています。それが一万二千年前頃再び寒冷化した時期があり(新ドリラス期)、効率的な食糧獲得が模索される中で、西アジアの小麦栽培や長江流域のコメの農耕などが発生したというのが、最近の農耕起源論です。農耕の発生から金属器の発明までの間を新石器時代と呼んでいます。イギリスの考古学者V・G・チャイルドは、人類が栽培と家畜の飼育を始めたことを「新石器革命」として一大転機に位置づけました。人類が自ら食糧を作り出すことが環境を変え、開発を進める文明社会への離陸点となったということは間違いありません。

では、日本列島の農耕のはじまりは、どのようなものだった

のでしょうか。日本列島では、弥生時代に大陸(韓半島)から渡ったコメ作りが農業のはじまりであり、水稲耕作の技術がしだいに発達したというのが定説でした。しかし、最近では、弥生時代に導入された稲作技術は、当初からかなり完成されたものであったことが示唆されるようになってきます。一方、古くから縄文農耕にかんする議論もありましたが、最近では、稲作に先行するアワ・キビなどの雑穀農耕の存在が追究され、弥生時代は両者が重層的に展開して形成された農耕文化であったと考えられるようになってきます。また、縄文時代の植物利用を再評価しようという議論も高まっていて、今村啓爾氏は世界的な視座から、すでにクリ・ヤマノイモなどの管理栽培やイノシシのキーピングなどが見られる縄文文化を新石器文化の一類型として「森林性新石器文化」と呼んでいます(今村一九九九など)。また、最近、豆類(ダイズ・アズキ)などの栽培穀類が、縄文時代はかなり古い段階まで溯ることも明らかになってきました(中山二〇一〇など)。今後、狩猟・採集経済と考えられてきた縄文文化は、それと調和的な植物利用(栽培)や雑穀栽培(農耕)が追究されることによってその見方が変わってくるかも知れません。それとともに日本列島の農耕文化の枠組みも少なからず変更されることが予想さ

れます。

さて、日本列島の後の農耕文化につながっていく穀物栽培は、やはり西日本から始まったようです。縄文時代の後期から晩期頃には、西日本を中心に雑穀やコメが炭化物や土器の圧痕などとして発見されるようになってきていて、韓半島の畑作文化の伝播が考えられています（宮本二〇〇〇）。水稻耕作文化の伝播は、遅れて縄文晩期の後半頃に北部九州で始まるようで、水田跡も見つかるようになります。弥生時代早期とも呼ばれています。このような水稻農耕文化は、弥生時代前期の間に、北部九州から西日本や東海筋では濃尾平野あたりまで広がったようですが、静岡県が含まれる東海東部や関東は、その動きが最も遅く弥生時代中期の中頃を待たなければなりません。しかし、先ほども述べたように、中部地域でも、それに先行する縄文時代晩期後半から弥生時代中頃にかけて、最近、アワ・キビなどの雑穀やコメの栽培の証拠が見つかるようになりました。これは、土器に残された種実の圧痕からレプリカを作成して観察する方法が進展したことによります（中山前掲書）。ただし、こうした農耕を取り入れた文化は、いまだ本格的な農耕文化と呼ぶことはできないと思います。

このように、日本列島の一部に弥生時代に成立した農耕

文化は、重層的に形成されたものだと考えられますが、やはり水稻耕作の定着がそれを決定づけたようです。温暖湿润な日本列島の気候環境では、畑で作物を栽培しようとする雑草もまた盛んに生育します。水田と田植への技術は、雑草を排除して稲だけを有利に成育させるもので、生産性も高く、日本列島の気候風土に適したものとして定着していったと考えられます（今村前掲書）。

#### ↑沼津（静岡）の農耕文化への胎動

先ほど述べたように、沼津周辺の縄文時代後・晩期から弥生時代前半頃は、遺跡が非常に少ない時期で、小規模な遺跡しかありません。弥生時代前期から中期前葉頃の大平丸山遺跡は、その頃の様相を示す遺跡の一つです。狩野川南岸の丘陵裾部の低地に位置する遺跡ですが、弥生時代中期前葉の丸子式土器とそれに併行する土器が多く出土しています（図5）。これらと一緒にイノシシやシカの獣骨が多く出土したことで知られるのですが、縄文的な狩猟が盛んに行われていたことが推定できます。一方、低地に立地し、土掘り具の打製石器が出土する点からは、小規模な農耕を営んだ可能性も考えられます。

この時期に農耕が行われたことが考えられる理由として、



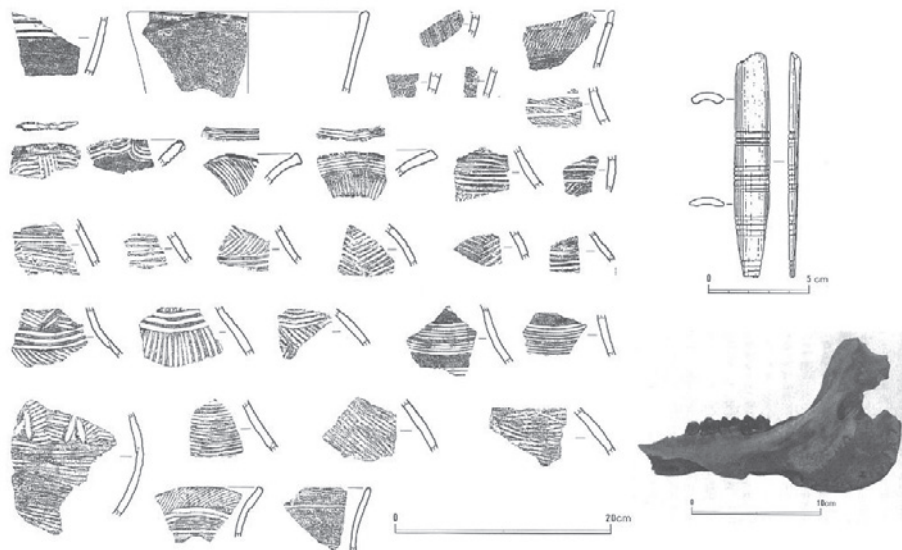


図5 丸山遺跡出土遺物

最近私たちが静岡市丸子地区周辺で行った調査を紹介しておきます。丸子地区は静岡市の安部川西岸に位置しますが、佐渡山という小高い山があって、その周辺は、古くから大平丸山遺跡と同じ頃の丸子式土器や大型の打製石斧（石鋏）が出土することで知られていました。私たちは、手越向山遺跡と呼ばれる佐渡山の東側斜面中腹を調査しました（静岡大学考古学研究室二〇一一）。まず、弥生時代中期後半の方形周溝墓と呼ばれる墓が発見されたのですが、その盛り土の下から、地面を耕したような跡が発見されたのです（写真1）。その痕跡は、地山の面に併行する数条の浅い溝として残っていましたが、その上の土は、分析の結果何度も掻き回されていることがわかりました。このような人為的造作は、今のところ畑以外のものとは考えにくいと思います。その土を研究室に持ち帰って洗った結果、炭化した種実が出てきましたが、その中に一点、アワかキビと考える



写真1 静岡市手越向山遺跡の畠状遺構

られるものがありました。この畑と考えられる遺構は、弥生中期後半より古い時期のもですが、周辺から出ている土器などから考えてやはり中期前葉の丸子式土器の時期のものと考えていいと思います。静岡清水平野では、同じ頃、瀬名遺跡などに低地で溝や耕作をしたような跡が見つかっていて、小規模な水田を営んだことも考えられます。私は、縄文時代以来の生業にこのような小規模な畑や水田の経営が加わるのが、この時期の生業の実態ではないかと考えています。

### 3 沼津の水稲耕作文化の形成

#### 十 西通北遺跡の環濠集落

西通北遺跡（沼津市大諏訪・小諏訪）では、先ほど述べたように、二〇〇九年の調査で弥生時代中期中葉の集落をとりまくと考えられる溝（環濠）が発見されました（写真2・3）。現在のJR東海道線の北側に沿って調査が行われたのですが、溝は断面逆台形で、幅二・五メートル前後、深さ一メートル前後、北側に弧を描くように約一二〇メートルにわたって掘られていました。おそらく、この北側にあった集落部分を取り囲むように掘られたものでしょう。<sup>(註3)</sup>



写真3 西通北遺跡環濠出土土器



写真2 西通北遺跡の環濠

遺跡は、浮島沼低地の東縁に位置していますが、シルト質の土壌の上に立地していて、環濠の底あたりからは縄文晩期後半頃の火山灰の層が見つかっています。このことから、この遺跡は、浜堤の上ではなく、黄瀬川や愛鷹山麓の小河川が形成した扇状地の末端部に位置していることがわかります。静岡・清水平野の弥生中期中葉に始まる有東遺跡や後期の登呂遺跡は、やはり安部川扇状地の末端付近に立地していて、そのような地点に特有の穏やかな水環境と微傾斜地を利用して水田を拓いたと考えられます（篠原二〇〇八）。西通北遺跡もまた、同じような弥生時代の水田が作られる土地条件といえるので、付近に水田を開発して経営した集落と考えてよいと思います。周囲には弥生中期後半の土器が多く出土した軒通遺跡があり、東方には、後期の集落として著名な沢田遺跡があります。西通北遺跡から始まって、この周囲に灌漑水田を経営する集落が広がっていったのではないのでしょうか。

先に、私は西通北遺跡の溝を環濠といいましたが、これには異論もあるようです。環濠集落は、弥生時代の周りを溝で囲った集落のことですが、佐原真さんなどが、「弥生時代に戦いがあった証拠だ」としたことから、「防衛施設足りうる溝が環濠だ」というような考えが広く受け入れられて

いるようです。西通北の溝は防衛施設としてはどうか、ということでしょう。しかし、戦いに備えたことを環濠の条件にするのは、少し本末転倒なことで、やはり溝で囲まれることが環濠集落の条件です。西日本で弥生前期の農耕集落が広がっていく頃や弥生中期後半に横浜の鶴見川流域に集落群が出現する頃など、新たな地点に農耕集落がつけられるときに環濠をもつ場合が多いのですが、西通北遺跡の例もこれにあたると思います。集落を作る目的は、そこに住む人々が協力して農耕を営み、生活していくことで、必ずしも戦いが目的ではない。寺沢薫さんは、「環濠の掘削やその後の維持管理は、防衛機能の保全よりもむしろムラの団結力の維持や共同幻想の強化にあつたのではないか」と言っています（寺沢二〇〇〇）。私も同じような考えで、周辺や他の地域から移動してきて、新たに形成される集落では、集落を囲い込むことでムラの求心性（共同性）が確保される。また、開発を推し進める集団を明示することは、他の集団との争いを避けることにもなったのだと思います（篠原二〇〇二）。こうしたことは、社会的にはむしろ重要な機能で、無文土器時代の朝鮮半島や弥生前期の西日本にも環濠集落があるわけですが、そうした長い農耕社会の経験の中で、一つの集落のスタイルとして培われてきたのが

環濠集落の姿ではないでしょうか。

西通北遺跡の環濠（集落）は、この地に新たに農耕集落が形成されて、多くの人が協力して農耕を営み、集団で居住したことを示しているのだと思います。

### 十三島市長伏六反田遺跡の方形周溝墓群

三島市長伏遺跡は、不明な点も多いですが、古くから知られる弥生時代中期中葉から後半の集落と考えられる遺跡です。ここでも、断面V字形の環濠の一部が見つかります。その南方の長伏六反田遺跡からは、弥生中期後半頃の一六基を超える方形周溝墓が発見されました（図6）。これらの方形周溝墓は、中心に埋葬された棺の周りを五〇メートル四方程の溝で四角に囲むものです。弥生中期の集落の周辺からは、静岡市有東遺跡、瀬名遺跡、横浜市大塚遺跡などがそうであるように、大規模な方形周溝墓群が発見されることが多いのですが、長伏六反田遺跡も長伏遺跡の墓域として形成されたものと考えられます。先ほどの西通北遺跡の周辺にも方形周溝墓群が存在するのではないかと思います。

こうした方形周溝墓もまた、農耕を始めた頃の集団の性格をよく示しているのではないかと思います。方形周溝墓



図6 長伏遺跡・長伏六反田遺跡の位置（左）と長伏六反田遺跡の方形周溝墓群（右）

はかなり大型の墓に一人が葬られるもので、総延長十数メートル以上の溝を掘って土が盛り上げられます。単独の土坑墓などに比べればかなり手厚い葬法だといえるでしょう。先に述べたように、一つの集落でもその数は多く、集落のリーダーや長老などに限定されない多くの人が手厚く葬られたのだと考えられます。弥生中期の集落では、多くの人が集団で居住し、協力して水田の開発や経営をおこなったわけです。誰かが亡くなったら協力して墓を作って手厚く葬る。自分や身内が亡くなった時もそのように手厚く葬られるだろうという期待感は、やはり集落の人々の結束を強めたのだらうと思われまます。

このように弥生社会では、耕地を開発維持し、さまざまな生業を営んでいく上で、人々の協力が求められたのだと思います。それを維持強化していくための集落のスタイル、墓制、ここでは述べませんが、さまざまな祭祀がその社会の仕組みの中に組み込まれていたようです。

#### 4 開発と地域社会の進展

##### ↑ 浮島沼周辺の弥生後期前半の低地集落

沼津周辺の弥生中期終末頃の遺跡はきわめて少なくなり、

後期になって再び集落が増加します。なんらかの環境変化や集団の変動が推定されますが、よくわかっていません。後期前半になって、浮島沼周辺には、新たに沢田遺跡、尾崎遺跡（環濠）、目黒身遺跡（環濠）、豆生田遺跡、雌鹿塚遺跡などの集落が現れます（図7）。環濠をもつ集落が多いのですが、個々の集落の規模はそれほど大きくなく数が多いのも特徴でしょう。尾崎遺跡では、集落の最初の段階に環濠が掘られることがわかっていますが、これらの環濠集落も先に述べた西通北遺跡などと同じように、新たな開発に際して作られたものだと思います。

後期の集落では、中期の段階に良くわからなかった生業の実態を示す遺物が多く出土しています。低湿地に位置する沢田遺跡や雌鹿塚遺跡、田方平野の山木遺跡などからは、鍬、鋤、エブリ、田下駄、堅杵、白など農耕に関する道具類や建築材、繊維具、容器、弓、祭祀具など豊富な木製品が出土しています。また、有頭石錘はこの地域に特徴的な漁具です。水稻耕作を基盤に狩猟、漁労などもおこなう生業が推定されます。広範囲に広がった各集落で開発がおこなわれたでしょう。

石器は伐採や加工用の磨製石斧が出土します。一般には後期になると石斧は激減して消滅していくので、鉄器が普

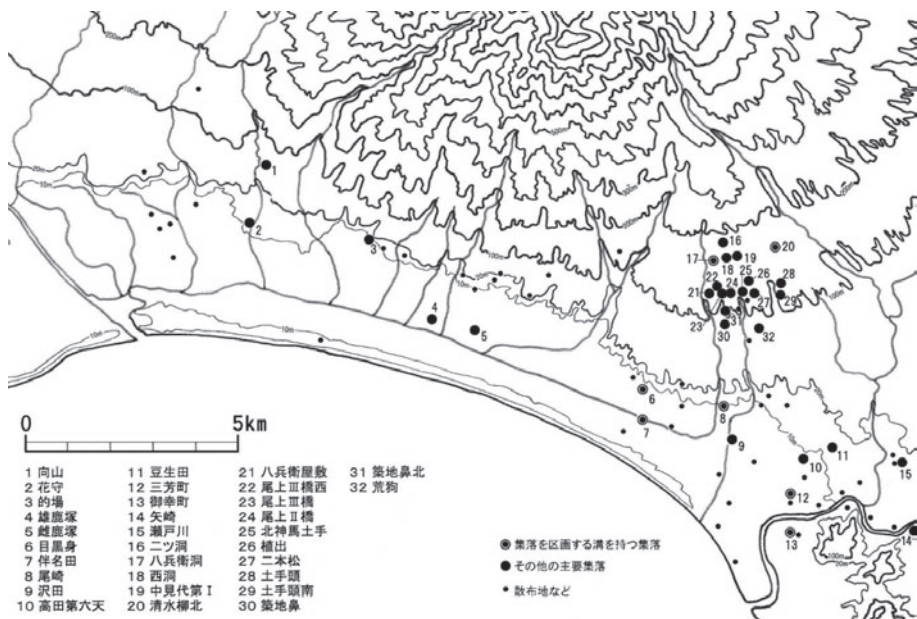


図7 浮島沼周辺の弥生時代後期の遺跡

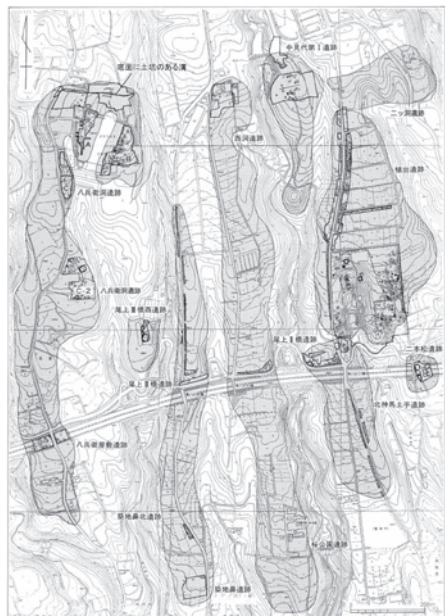


図8 足高尾上遺跡群全体図

及したのではないかと考えられていますが、この地域では利器として石器が残っていくのが特徴です。しかし、後期になって特に豊富に出土する木製の道具類や資材は、盛んな集落形成や開発の進展を示すものと考えられます。

↑丘陵上の大集落——足高尾上遺跡群の形成

後期中頃になると浮島沼周辺の集落の多くは終息を迎え、代わって愛鷹山麓の標高一〇〇メートルを超える地点にかなりの規模の集落が出現してきます。代表的なものは足高尾上遺跡群（図8）で、東名高速道路沼津インター西側か

ら免許センター付近にかけての標高八〇〇〜一八〇メートル付近、東西二キロメートルの範囲に、八兵衛洞、北神馬土手、植出などの多くの住居を構える集落が分布しています。

これらの集落は、水田が営まれる低地部からはかなり離れて立地するわけですが、どのような生業を営んだのでしょうか。これにかんして、植出遺跡や八兵衛洞遺跡などでは畑に関連すると考えられる溝が住居に近接して発見されています。植出遺跡(図9)では、中央の谷部分に格子状に交差する溝群(図10)が、台地上の集落域にも並行する溝

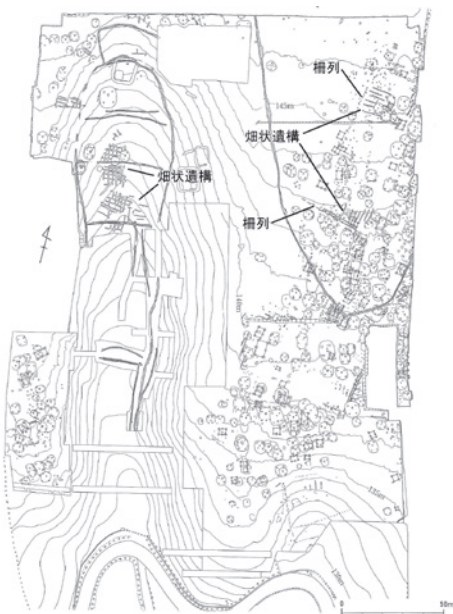


図9 植出遺跡全体図



図10 植出遺跡の畑状遺構

群が発見されました。溝は幅二〇〜五〇センチメートル、深さ一〇〜三〇センチメートルでややまちまちですが、どの溝も比較的急角度で掘り込まれています。溝の間隔も一・五メートルほどから四メートルを越えるものなど様々です。竪穴住居と切り合いがあるものもあって、住居を切るもの、切られるものの両者があることや弥生後期の完形土器が出土した溝もあることから、弥生後期の集落と同時期に住居とこの遺構が替わる替わるに作られたことは間違いありません。また、一部で加藤芳朗さんによって作土と考えられる土層の分析が行われていて、根跡密度の分析などから畑として矛盾ないという結果が得られています。

報告書では、畑状遺構としてそれが畑とどのようにかか

わかるかは明言していませんが、私は、これが仙台市の佐藤甲二さんが示している「天地返し」の跡としての「畑の耕作痕」（佐藤 一九九八）と良く似ていると思っています。畑は連作すると地味が落ちるので、それを回復するための方策の一つとして、下層の土を掘り起こして攪拌する天地返しが行われる場合があります。佐藤さんが示した天地返しの特徴とこれらの畑状遺構の特徴は良く似ているのです。もしそうだとすると、これらの畑状遺構は地力の回復を行いなながらある程度長期間使用されたことが考えられますし、格子目に交差する溝群は、それが複数回行われた可能性も示しています。丘陵上部の畑状遺構は周囲に直交や並行する柵列があつて、それによって区画されているように見受けられます。天地返しが行われていない畑は確認できていないとすると、整然と区画された畑がかなりの広範囲に広がつていたことも予測できます。また、ここに居住域が重複することは、居住域と畑の切り替えが行われていたことも考えられるわけです。足高尾上遺跡群の畑は、現在想定されているよりも大規模・集約的で、長期的に経営された可能性があります。

一方、足高尾上遺跡群の北端（丘陵の上部）に位置する八兵衛洞遺跡では、尾根線を東西に横断して掘られた環濠

と同じ形態の断面V字形の溝が発見されました。さらに八兵衛洞遺跡では、溝の中に落し穴と考えられる大型の土坑が多数掘られている状況も確認されています。集落群の北側（尾根の上位）から、外部の人間が侵入するとは考えにくいので、区画や排水のほか、獣の排除や捕獲の機能をもつたものであることが明らかです。畑地にイノシシが入り込むと大変なことになるのは良く知られたことだと思いますが、足高尾上遺跡群が、広い畑地を構えた集落群だったとするなら、防獣は切実な問題だったことでしょう。この溝と土坑群はまさにそれを示しているのではないのでしょうか。

足高尾上遺跡群では、石錘や浮子といった漁労具が発見された遺跡もあります。植出遺跡や八兵衛洞遺跡では、住居跡や土器から炭化米も検出されています。畑で何を作ったかは不明ですが、この時期に陸稲があつたかも不明で、コメは水田で作つたと考えた方が良くかも知れません。こうしたことから、低地や海洋まで行き来していたことが推定され、低地部で水稻耕作もおこなっていた可能性も考えられます。

#### 十 集落の移動の理由

浮島沼周辺と愛鷹山麓の後期の集落の動向からみると、



後期前半の低地集落が、後半にかけて丘陵上に移動した可能性が高いと思われます。低地部のなんらかの環境や社会的動向の変化が推定されるわけです。時期的には倭人伝の倭国大乱の時期とも重なりそうですが、果たしてどうでしょうか。

静岡市の登呂遺跡や浜松市伊場遺跡では、後期の中頃にかけて集落が洪水に見舞われることが知られています。そうした低地環境の変化が浮島沼周辺でも起こった可能性は十分に考えられます。最初に見たように、愛鷹山麓の弥生後期の高地集落が立地する地点付近は、旧石器時代や縄文時代にも遺跡が営まれた地点です。低地の居住を放棄するとき、むしろ次に居住と生活に適した環境は、そのような高位置の丘陵部であった可能性もあります。また、弥生中期前葉の手越向山遺跡の畠状遺構もまた丘陵の斜面地に作られたものでした。日当たりの良い南向き斜面地は、まだ良く検討されていない土壌条件なども含めて、畑作の適地であったのでしょうか。

足高尾上遺跡群で想定された畑作は、初期の畑作に与えられがちな粗放なイメージとは異なり、計画的に耕作地を造成して管理した、ある程度大規模・集約的な畑地であった可能性が考えられます。それは、弥生時代に形成された

本格的な農耕社会が、地域的な環境の変化に適應しようとした一つの姿であったのでしょうか。

一方、より厳しい環境で大きな集団が限られた範囲に居住していくことは、おそらく社会的な負荷を内包していたのだろうと考えられます。そのような集団組織をなんらかの形に変えて昇華させていこうとするような欲求は、集団内にも潜在していたのではないのでしょうか。

また、沼津周辺の弥生後期集落が、すべてこのような高位置に移動したわけではないようです。狩野川下流の微高地にある御幸町遺跡は後期前半から後半にかけて継続して集落が営まれ続ける遺跡です。狩野川にたいしては香貫山の背後にあつて、低地でも環境の変化の影響を受けにくかったのかもしれない。

## 5 広域的な交流の開始と古墳の出現

古墳時代初頭頃（廻間Ⅱ式頃）になると、弥生時代の交流圏を大きく越えた、土器の広域交流が見られるようになります。沼津の周辺にも見られるようになる外来系土器を見ると、その発信地となったのは伊勢湾岸や近畿地方、北陸地方などでした。いち早く政治的な社会組織や首長墓祭

祀を創造しつつあったそれらの地域との交流の開始が、この地域に内在する矛盾を昇華するきっかけになったことは想像に難くありません。そうした墳墓として最も古いものの一つは、富士宮市丸ヶ谷戸墳丘墓（写真4）で、辻畑古墳と同じ前方後方形をした周溝を持つ



写真4 富士宮市丸ヶ谷戸遺跡前方後方形墳墓

ていて、墳長二六、二メートルを測ります。この前方後方形墓と近接する方形の竪穴住居の土器は接合関係を持つているのですが、それらには伊勢湾岸や畿内、北陸地方など各地の土器が含まれていました。

同じ頃、静岡市汐入遺跡（図11）や浜松市大平遺跡では、集落の内部を居住域や祭殿、倉庫などの機能に分けて溝や堀で方形に区画する集落が見つかっています。こうした集落は、経済や祭祀の機能を集中させる、いわば政治的な集落といえるでしょう。沼津周辺でも時期は少し下りますが、

藤井原遺跡は、そうした集落である可能性があります。こうした動きが始まってまもなく、初めて大型の前方後方墳として築造されたのが辻畑古墳だと考えられます。

### まとめ

沼津周辺は、浮島沼低地と愛鷹山、狩野川低地と伊豆・箱根の丘陵部といった多様な環境を有しています。旧石器時代や縄文時代の自然環境を利用する生活の中で、盛んに利用されたのは、愛鷹山麓などの丘陵斜面地でした。弥生時代中期

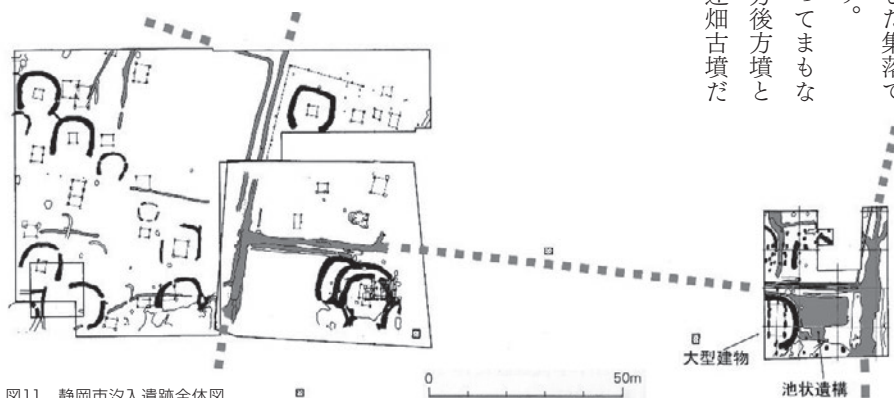


図11 静岡市汐入遺跡全体図

の中頃になると、この地域にも初めて本格的な農耕集落が現れます。西通北遺跡の環濠集落は水田耕作に適した浮島沼東縁の扇状地末端に位置していました。この時期以降、多くの人々が耕地の開発や経営を通して協力し合う農耕社会が芽生えます。弥生後期になると、おそらくしだいに冷涼化する気候や鉄の普及といった周辺状況に呼応してにわかに関濠が進展したようです。生業は、農耕を中心としながらも周辺の海、沼、山にも適応してやや多様なものになったようです。しかし、やがて訪れた低地環境の変化は、愛鷹山麓のような高位置への集落の移動と集住を余儀なくしました。しかし、そこでの畑作を取り入れた生活もまた、ある程度成熟した農耕社会が、新たな環境に適応した一つの姿を示しているようです。

弥生中期から後期までの数百年の間に、沼津の初期の農耕社会はめまぐるしく変化しながらも、多様な環境に適応した地域社会を形成してきました。一方、それが内包していた矛盾に、内外からの新たな動きが加わったとき、辻畑古墳に象徴される古墳文化が始まったといえるでしょう。

## 註

(註1) 本文章で示した年代は『沼津市史 通史編』(沼津市二〇〇五)を参考にした。このため旧石器時代の年代は非較正の炭素年代、それ以外は較正された炭素年代を用いている。

(註2) 現在、報告書が刊行されている(静岡県埋蔵文化財調査研究所二〇一一)。

(註3) この後、二〇一〇年の沼津市による調査で、溝の北側に沿った柵列と竪穴住居跡二棟が発見されている。

## 参考文献

石川日出志 二〇〇一 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第一一三号

今村啓爾 一九九九 『縄文の実像を求めて』吉川弘文館

小泉祐紀 二〇〇二 「愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態」『弥生集落論』中部弥生時代研究会

佐藤甲二 一九九八 「畑跡の畝間と耕作痕について—仙台地域の考古的事例から—」『人類誌集報1998』

静岡県埋蔵文化財調査研究所二〇一一 『西通北遺跡』

静岡大学考古学研究室 二〇一一 『手越向山遺跡の研究』

篠原和大 二〇〇二 「環濠―静岡県における弥生時代後期環

濠集落の理解に向けて―」 『静岡県における弥生時代集

落の変遷』

篠原和大 二〇〇五 「神明塚古墳出現前後の地域様相」 『神

明塚古墳（第2次）発掘調査報告書』 沼津市教育委員会

篠原和大 二〇〇八 「静岡・清水平野における弥生遺跡の分

布と展開」 『静岡県考古学研究』 四〇〇

寺沢薫 二〇〇〇 『王権誕生 日本の歴史02』 講談社

中山誠二 二〇一〇 『植物考古学と日本の農耕の起源』 同成

社

沼津市 二〇〇二 『沼津市史資料編 考古』

沼津市 二〇〇五 『沼津市史通史編 原始・古代・中世』

宮本一夫 二〇〇〇 「縄文農耕と縄文社会」 『古代史の論点』

一

図6…近藤舞 二〇〇〇 「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺

跡群」 『静岡県考古学研究』 三二一

図7…篠原 二〇〇五

図8…沼津市教育委員会 二〇〇四 『八兵衛洞遺跡発掘調査

報告書』

図10…静岡大学考古学研究室 二〇一一

図11…藤枝市 二〇一〇 『藤枝市史通史編上』

写真1…静岡大学考古学研究室

写真2・写真3…静岡県埋蔵文化財調査研究所 二〇一一

写真4…富士宮市教育委員会 一九九一 『丸ヶ谷戸遺跡』

## 図の出典

図1・図3・図4・図5・図9…沼津市 二〇〇二を改変

図2…白石浩之 二〇〇二 『旧石器時代の社会と文化』 山川

出版社（日本史リブレット）